

# 未来



全労協・郵政産業労働者  
ユニオン長崎中郵支部  
機関紙「みらい」  
NO. 4319  
23年1月24日(火)  
Tel・Fax 095-828-1953  
文責 支部書記長

## 新たな戦前を、現代の戦争にさせないために

おはようございます。

一月十九日、第百六十八回芥川賞が佐藤厚志の「荒地の家族」と決まった。新聞では先の東日本大震災での家族の生き方を描いている小説という作者は「震災が忘れられることへの抵抗になれば・・」と語る。

一月十八日、東京高裁は東電・福島原発での業務上過失致死事件で、東電幹部を無罪とした。事故から十二年もたつのに、いまだに多くの人が自宅に帰れない大事故を、予測不能として許されるなら、次もまた事故が起き、また問責無しとなる。



この言葉通り一九三五(昭和十)年、菊池は芥川賞を創設し、芥川の名前は以来八十八年も日本文壇界に光り続けることとなる。

いくら国策の原発だからとしても、国民に被害を与えていいはずがない。こんな不条理のもとで震災が次第に過去となると思ふ。

この芥川賞は一九二七(昭和二)年に「ぼんやりとした不安」という迷言を残し自殺した作家・

芥川龍之介を追悼し、文藝春秋の作家・菊池寛が始めたものだ。

芥川と菊池は東京帝大の同期で、後日の雑誌・文藝春秋での追悼文で「彼のごとき高い教養と、和漢洋の学問を備えた作家は、今後絶無であろう」と最大の賛辞をおくり、「同志の続く限り、龍之介の随筆集を掲載する」と述べる。

ちなみにこの賞の第一回の受賞作は石川達三の「蒼氓」だった。この小説は、貧困からブラジル移民をせざるを得なかった人々を、「国による棄民」とした小説で、今回の受賞作の大震災の原発事故での棄民策と通底するものがあるのだろう。

小説は時代を映す鏡であるが、石川達三はこの二年後、中国との戦争の従軍記者として南京に入

り、「生きている兵隊」を「中央公論」に書くが、国と軍はこれを直ちに発禁とし、石川も「聖戦に従う軍を誹謗した」として、懲役四年の刑となる。戦争とともに言論への弾圧が急激に進んだのだ。

時代は下り現代だが、暮れの京都・清水寺の昨年の漢字が「戦」と決まったが、同じ流行語でもスポーツの「ブラボー」や「村神様」とはだいぶ趣が違う。

またタレントのタモリが、十二月に「今は新たな戦前だ」とテレビの「徹子の部屋」で述べて話題になったが、まさにその通りだと思ふ。



戦前や戦中に、国や軍に反対する言葉を発することは、いつの時代も大変に勇気がいると思ふ。

かの菊池寛も一九三七年の日中戦争の始まりに對して、文藝春秋で「中国との戦争は遺憾だ。そもそも四億も人がいる中国を屈服させることなど

できない」と国の戦争策を批判している。まだこのころはいくら自由だったのだ。

しかしそれから大政翼賛会や、作家などによる日本文学報国会の発足で、菊池などの文芸界も「戦争協力」を公言するに至る。



『断平憤激大会』が開かれ、大日本は神国なり、と叫んだ。主催は恥ずかしながら大日本言論報告会だった。「今日朝日文庫」新開記者までが翼賛で戦争に加担する時代の現実だった。

無論、歴史的にはあくまでも抵抗をつづけた人もいたが、多くの作家や言論人が、和平派とみられていた非軍人の近衛文磨首相らによる新体制＝翼賛体制に包囲されていく。それほど、現実の戦争は国民を一気に戦争協力者にさせてしまうのだ。

最後に、現代を生きた新聞記者・轡田隆史(元朝日新聞記者)は、反省の弁としていかに書く。「一九四五(昭和二〇)年一月十七日に、伊勢神宮が空爆を受けたため、

いま政治家が「台湾有事は日本有事だ」と公言する。先の戦前には「満蒙は日本の生命線」として中国との戦争へなだれ込んだのと同じく、今ははつきりしているのは、満州も蒙古も台湾も他国領土である。この意識で、敵基地先制攻撃論をとれば、相手国も宣戦布告とるのは明白だ。政治家は戦争回避が仕事であり、私たちがそんな政治家を選び、自らも憲法を守り、戦争政策に反対し続けることが大事だ。

新たな現代の戦前にどう生きるのか。現実の戦争の前に、私たち一人一人が問われているのだ。

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員、希望者全員、正社員化を。

ゆめば、均等待遇、なぐさみ差別。

ユニオンは労契法裁判に勝利するぞ！

